

研究だより



香川大学教育学部附属

坂出小学校

< 目 次 >

| | | |
|--------------|---|------------------------|
| ◇ごあいさつ | 1 | ・各教科における「思考力」と公開授業 2～7 |
| ◇第90回教育研究発表会 | | ・シンポジウム・講演 7～8 |
| ・研究発表会を振り返って | 1 | ◇あとがき 8 |

ごあいさつ

校長 たかい ただよし 高井 忠昌

本校第90回教育研究発表会が、5月25日、26日の2日間開催されました。県内外から延べ900名もの教育関係者に参加いただき、脳科学の知見を生かした教育方法等の研究成果を発表できました。ご指導や助言をいただいた香川県教育委員会、坂出市教育委員会、香川大学教育学部の方々、ならびに研究会当日のご援助をいただきましたPTA、ボランティア学生の方々に厚くお礼申し上げます。

今後とも、本校の教育研究へのご支援、ご協力をお願いいたします。



● ● ● 第90回教育研究発表会 ● ● ●

研究発表会を振り返って

研究主題

「思考力」をはぐくむ学びの創造（1年次）

— 脳科学研究との連携、授業力を高める校内研修 —

両日とも、公開授業に対して、多くの先生方にご参観いただきました。

子どもの「思考力」を育成するために、本年度は、

- ① これまで教師が蓄積してきた経験や勘による教育実践を、脳のメカニズムから捉え直してみる
 - ② 授業者だけでなく、参観者も自らの授業力を高めていくことができる校内研修の在り方を探ること
- という2つの視点からの取り組みについて、提案しました。

①については、朝のドリル学習による脳のウォーミングアップだけでなく、学校生活の大半を占める授業づくりに脳科学研究の知見を関連付けながら、教材や支援の有効性を提案しました。

参会者の先生方のアンケートにも、

「思考力を育成する授業の中に、脳科学研究の知見を生かすという取り組みはすばらしい。」

「これまでの実践に脳科学研究の知見の裏付けがあることで、自信をもって授業に取り組めると思う。」といった感想が、数多く寄せられました。

また、②については、昨年から様々な事前研、事後研のモデルを試行し、それぞれのよさを取り入れた事前研モデル「附坂小授業クリエイティング」、事後研モデル「附坂小授業リフレクション」を提案し、研究会当日の研究協議会は、全て「附坂小授業リフレクション」で進行了しました。

特に、「附坂小授業リフレクション」のような付箋紙やフリーカードを用いた参加型の事後研は、香川県下の小学校の現職教育にも浸透しつつあるようです。



各教科における「思考力」と公開授業

国語科



かなざき ともこ
金崎 知子



もりやま けいざう
森山 敬三

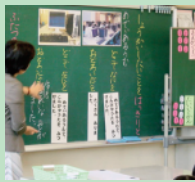


まなべ よしき
真鍋 佳樹

ことばとそれが指し示す意味，ことばとことばの関係，ことばとその使用者等について，既成の秩序の中で論理的に吟味する力（論理的思考力）

第1学年「きいて！ たんけんでみつけたよ」 学習指導者 金崎 知子・多田羅秀美

学校探検で見つけたものを紹介し合う活動を通して、『どこで，何を見つけたのか』『驚いたこと』の二つのまとまりで話す』『詳しく話す』を見付け，自分の紹介に生かすことをねらいました。二つのまとまりで書かれたスピーチ原稿と「どこで，何を」しか書かれていない原稿とを比べたり，「きれいな音」という抽象的な表現と「タン・タラランという音」という具体的な表現を比べたりすることで，「驚いたこと」が書かれていないことや抽象的な表現であることの分かりにくさを実感することができました。子どもたちは，主体的に探検で撮った写真を見直し，驚いたことをはっきりさせるための視点（大きさ，形，色，数，音等）や具体的な表現を見付けていきました。これは「分かりにくいことを，自発的に分かろうとすることで脳が活性化される」という脳科学の知見からも有効であったと考えます。



第3学年「ことがらの中心を考えながら読もう —『自然のかくし絵』—」 学習指導者 森山 敬三

文章中の各段落における中心文を見付け，短くまとめる力を育成することをねらいました。段落の中心文を見付けるには，文相互の関係を考えることが重要ですが，それらの関係を付加，理由，例示，転換，解説，順接，逆接，補足・・・と個別に押さえていくのでは，複雑かつ，その定着も不十分とならざるを得ません。そこで，文相互を「同質」「対立」「因果」「独立」の4種類の関係に集約し，そこから中心文を見付ける読みの授業を提案しました。これは，「全体像を把握しておく，個々の部分も分かりやすくなる」という脳科学研究の知見から見ても，有効だと考えます。子どもたちは，「～からです。」「ところが」といった接続語に目を向けながら中心文を見付けていくとともに，中心文だけでなく段落相互の関係を考えると中心段落も見付けられそうだという次時への見通しをもつこともできました。



社会科



やまうち ひでのり
山内 秀則



こにし ひろし
小西 寛

社会的事象について，自己の既有経験や調べから得た事実を基に，事象に含まれる事実を比較・類別したり，空間的・時間的・公的視野の広がりの中で事象相互を関係付けたりして，その特色や意味を捉える力

第3学年「売る人 買う人 つくる人」 学習指導者 小西 寛

コンビニで行われる販売の特色を捉えることをねらいとしました。本時では，「自分が店長なら，『やきそば』と『ざるそば』どちらの商品の発注を増やすか」という課題設定の下，互いの考えを交流し合う活動を展開しました。こうした意志決定を伴う学習では，自分と友達との判断の違いから自分の考えの練り直しが行われます。こうした練り直しを経て会得した思考様式は，見学や調査のみによって会得したものよりも強く記憶されるものと考えます。このことは，「失敗や試行錯誤を繰り返すことで記憶は強化される」という脳科学の知見とも整合していると言えます。子どもたちは，自分や友達の考えを類別しながら，「味」「食べやすさ」「好み」等の観点を見出していきました。さらに，気温や天気と実際の発注を示した資料を読み取る活動を通して，「明日の天気や気温」と「発注」の関係もつかみ，自分の判断を見直していきました。



第6学年「日出づる国のかたち 一太子百年の計一」 学習指導者 山内 秀則

十七条憲法に込められた太子の願いを基に、飛鳥の時代像を描くことをねらいました。単元の導入において、外国の視点から飛鳥時代の構造をシンプルに捉えるようにしました。具体的には、600年には国家と認められなかったにも関わらず、607年には対等外交が始まるという隋の対応の変化に着目し、年表を構造的に表すようにしました。これを手がかりに対等外交のためにはどんな国づくりが必要かを予想しておくことによって、十七条憲法にはその内容が書かれているはずだという見通しをもつことができました。このように教材を組織することは「汎化から分化へ」という脳のメカニズムに合致しています。実際の授業では、条文を比較・類別し、予想した国づくりの視点との整合を吟味していきました。その上で、聖徳太子の願いの強いものはどれかを考え、仕組み図に表しました。子どもたちは、「天皇中心の、争いのない安定した国づくりが始まった時代」と太子が描いた理想の国のかたちを思い描いていきました。



算 数 科



みやけ ひさのり
三宅 永哲

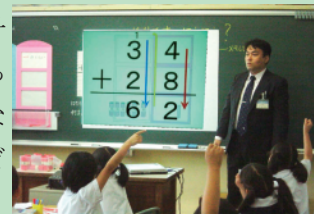


おおやま たかひさ
大山 貴久

- 事象のしくみやその表現・処理の方法を構造的・形式的に捉える力
- 経験に照らしながら問題とその便利な解き方を見出そうとする力

第2学年「考えたら、できた！ 新しいけいさん」 学習指導者 三宅 永哲

本時は、繰り上がりのない筆算の2つの計算方法、A方式（十の位からたす）とB方式（一の位からたす）を、繰り上がりのある筆算に適用し、処理のしやすさという点において、一の位から先に計算する方法のよさに気付くことをねらいました。そして、自分たちで考えた繰り上げを含む一連の計算処理がどういふものかを確認することができる視覚映像を教材として用い、思考様式の強化を図りました。この教材は、「思考によって得られる心像は、視覚等の五感を通して、対象を知覚することから始まり、経験を通して形成される」という脳科学の知見からも、本単元でねらう筆算の意味や計算のよさを分らせるのに有効であると思われます。授業では、「一の位から計算すると繰り上がりがあるかどうか分かり、十の位の計算の答えを消さなくてよい」という理由が出されました。記数法の「左から」にこだわった子どもも映像で確認した後には、計算のよさに目が向きました。



第4学年「広げよう 数の世界 一はしたの数一」 学習指導者 大山 貴久

1日目は、数直線を用いながら小数が整数と同じ仕組みで作られていると捉えることをねらいとしました。そこで、数の抽象化の段階に合わせて子どもの反応を組織し、その抽象化の過程で子どもが主体となって数直線を創る活動を教材として開発しました。これは「自分が操作できる心像をもつことで、それを用いて抽象的な思考を行うことができる」という脳科学の知見からも、有効だと思われます。授業では、小数を具体的な量の単位を付けて比べる方法が出された後、0.1を一つの単位として比べる方法が出され、整数と同じように考えられることが導かれました。さらに、大きさの違いをよく分かるように並べるために、一つの直線の上に目盛りを付けて並べればよいという意見が出され、図の左端を0にすること、0から1の間を10等分すること等の約束を話し合いながら、数直線を創っていくことができました。



2日目は、少人数で小数の計算の仕方を考えました。先生と一緒に数直線や小数ベルトを用いながら考えたパワーアップコース、自分たちで見通して、数直線や図を用いて考えたチャレンジコース、どちらのコースでも、小数の計算の時には、0.1のいくつ分になるかと考えれば、整数と同じ考え方で計算ができることに気付いていくことができました。

理 科



はやし ゆうじ
林 雄二



とうじょう なおき
東条 直樹



よこかわ かつまさ
横川 勝正

比較したり、事象の変化にかかわる要因を抽出したり、要因を制御して計画的に調べたり、多面的に追究したりしながら、自然事象の特性を捉える力

第4学年「水はどこへいったの？－水の変身物語－」 学習指導者 林 雄二

水蒸気の温度が下がり、水に変化する現象において、気体から液体へと状態が変化するだけでなく、体積も変化することを捉えることをねらいとしました。しかし、水蒸気は視覚的に確認することができないため、水蒸気と空気を混同して捉えてしまう子どもにとっては、状態変化と体積変化を関係付けて考えることは困難です。そこで、半具体物としてイメージ図に表出させて現象を見つめ直すことで、類推の思考を助け、二つの現象を関係付けて考えやすくすること、また学習の進行に伴ってイメージ図を修正させていくことにしました。これは、「類推的な思考をフル活用するには、思考の対象となるものを図式化（モデル化）するとよい」という、脳科学研究の知見からも有効であると考えられます。

本時では、袋に集めた水蒸気が水に変化する現象と、袋のかさが小さくなる現象の両方を説明できるように、水蒸気の粒と水の粒の大きさを変えたイメージ図に修正していきました。そして、状態と体積は伴って変わるという思考様式を、水蒸気を密封したアルミ缶の実験に転移・活用させました。アルミ缶が音を出しながらつぶれる様子を観察し、子どもたちは自分たちの予想の正しさを再確認しました。



第5学年「探ろう！ 植物の発芽と成長に適した条件」 学習指導者 横川 勝正

インゲンマメの成長に関係すると思われる「水」「日光」「肥料」「温度」など複数の要因のうち、1つだけを変化させ、他は同じになるよう制御した対照実験を計画していく力の育成をねらいました。

本時では、生活班の中で複数の要因を一人1つずつ分担して調べるようにすることで、「自分が責任をもって調べ、みんなに知らせるんだ」という意欲（＝情動）を高めました。また、各々が考えた実験方法について、①生活班で、②実験方法別グループで、③学級全体で、と繰り返し相談する場を設け、自ら吟味・修正していけるようにしました。これらは、『情動の喚起』や『繰り返し』が記憶を強化する」という脳科学の知見からも有効だと考えられます。「成長には適度な温度が必要かどうかを調べたいので、インゲンマメを校庭と冷蔵庫の中に置こうと思います。」「それでは日光の当たり方まで変わってしまうよ。」「校庭のものにはカバーをかけたらどうかな。」「それで空気の条件は同じになってるのかな。」といった話し合いを通して、要因を適切に制御した実験を計画できていました。



第6学年「水溶液パワーの秘密を解明」 学習指導者 東条 直樹

「水溶液の金属を溶かす力を強くしたい」という子どもの強い意識を単元を中心課題として設定しました。この課題の解決に向けて、子どもたちは経験を基に、解決の見通しをもち、実験方法を自ら考えることとなります。そして、様々な試行錯誤をすることが予想されます。それにより、自ら水溶液の多様な性質に気付き、水溶液を多面的に捉えることができるようになると考えました。脳科学研究の知見からも、試行錯誤をする中で記憶がより正確になり、強化されることが分かっています。すなわち、「水溶液の〇〇という性質に着目する」という思考様式の定着になると考えたのです。

本時では、多くの子どもが「蒸発させて量を減らしたアンモニア水は濃くなり、金属を溶かす力が強くなる」と考えていました。しかし、実験をすると、逆に蒸発させなかった方がよく溶けたのです。子どもたちは実験結果について話し合う中で、「水溶液の濃度と蒸発の関係」「水溶液の濃度と溶け方の関係」に着目して考えることができました。そして、その思考様式を生かした再実験の方法を模索しました。



音楽科



くめ あや
久米 亜弥

- 楽曲や音のもたらす気分や内容から、表す情景を想像したり、特徴付けている要素を感じ取ったりする力
- より豊かな音楽活動の方法を求めて、感じ取ったことを基にして自ら創意工夫していこうとする力

第3学年「広げよう わたしの音物語」

音楽づくりにおいて、時間の経過や周りの状況の変化によって新たな音楽的要素を加えて表現することをねらいとしました。そのために、場面の前後を容易にイメージしやすい絵本を用いました。これは、「イメージを具体化することで表現の工夫を考える際の要素が増える」という脳科学の知見からも有効であると思われます。子どもたちの選んだ場面を「その後どうなる？」と教師が問いかけると、「ボールを蹴ったら窓ガラスが割れて、その後ガラスが小さく飛び散ってハラハラと落ちました。」というように子どもたちは自由に想像を膨らませていきました。

このように、場面に合った音の模倣に留まらず、楽器の叩き方を強くしたり音色や速度の工夫を加えたりしながら、自分なりの表現へと高めていくことができました。



家庭科



はが さやか
芳我 清加

- 生活事象を様々な観点から多面的に見直し、総合的に捉える力
- 自分の生活とのかかわりで生活事象を捉え、転移・活用していく力

第6学年「朝食で頭も体も元気になるぞ！」

本時は、栄養バランスや調理時間などの観点から、自分の体や頭のためになる朝食を考えることをねらいとしました。朝食の内容を考えるにあたり、朝食の必要性や価値を子ども自身が感じ、よりよい朝食の在り方を「自分のこととして」考えられることが重要です。そんな必要性を「実感」できる手だてとして、各自が朝食の前後に脳の活性化を計る「脳力チェック」、「生活の記録」を教材として用いました。「好奇心は、自分にとって大事なことや必要なことを見極め、それに向かう注意を維持する行動の源となり、情動は記憶の形成を促進する」という脳科学研究の知見からも、「実感」を伴わせることは有効であると考えます。子どもたちは、自分のデータを専門家の研究結果に裏付けを求めながら、朝食が脳にも体にも重要であると実感し、自分にとってよりよいの朝食メニューを考えることができました。



図画工作科



こいで やすひろ
小出 泰弘

- 感じたことを基に多様な観点でイメージを深めたりアイデアを広げたりする力
- 表したいものを実現可能なものにするために表現方法を吟味し、活動の見通しを立てる力

第5学年「2つの世界を行ったり来たり」

本時は、1枚の板の上に表される2つの世界がより対照的になるように、色や形の組み合わせを工夫して、イメージに合う背景を描いていくことをねらいとしました。その際、頭の中で思い付いた表現方法を用いて、そのまま作品づくりへ向かうと修正しにくくなるため、その他の表現を構想する機会は失われてしまいます。そこで、これまで経験した技法や、色や形の感じを何度も試す場を設定しました。これは「失敗の繰り返し、試行錯誤によって記憶が強化される」という脳科学の知見からも有効であると考えます。

実際の授業では、「明るい世界⇔暗い世界」の背景を「たくさん色とはじけたような線⇔灰色と黒のゆがんだ線」で表すなど、子どもたちは、対照的な感じを強調する色や形の組み合わせに気付いていくことができました。



体 育 科



みやざき あきら
宮崎 彰



きたむら あつこ
北村 篤子



おおひがし
大東ひとみ

- めざす動きや生活と自己の現実を照らし合わせながら、自己の能力に合ったイメージをもち、適切な課題を設定する力
- 課題解決に向けての手だてを選んだり、見出したりする力

第2学年「虫のせかい」 学習指導者 北村 篤子

本時では、虫の1日という簡単なお話づくりを通して、場面や状況に応じた動きがあることに気付き、表現に生かすことをねらいとしました。そこで、視覚や聴覚等を働かせながら、多様な動きを考える場を設定しました。「思考によって得られる心像は、五感を介して様々な対象を知覚することから始まり、経験を通して形成される」という脳科学の知見からも、オノマトペを用いたり、友達の動きを見たりすることは、本時ねらいとした「思考力」を育てるために有効だと思われます。

授業では、「チョウチョになるよ。のんびりとした日だから、友達と『ひ～らひ～ら』大空へ散歩に行くよ。」というように、今までに様々な虫になり自分たちで見付けてきたオノマトペから、話の題に合ったものを選択することができました。子どもたちは、虫になりきって踊ることで、オノマトペに含まれている動きの速さや変化等を体で感じ、題に合っているか確認して踊ることができました。



第5学年「生み出せシュートチャンス - 3on2 -」 学習指導者 宮崎 彰

本時は、パスをつなぐためにパサー、レシーバー両者の視点から動きの工夫を考えることをねらいとしました。そこで、攻撃が3人、守りが2人という数的優位な状況下でのゲーム「3on2」において、動きの工夫を考える際、プレーヤーからの映像を教材として用いることとしました。このことは脳科学の知見「ものごとが連合する（結び付く）と、長期記憶になりやすい」から見ても有効であると思われます。

実際に、パサー、レシーバーそれぞれのプレーヤーがどのように見えているのかに加え、両者の動きを同時に捉えることができる映像を用いてパスをつなげる動きの工夫を考えました。映像を見た子どもたちからは「パスをもらう前にパサーに合図を送ればよいのでは」「パサーはレシーバーの動きを見てタイミングよくパスを出さなければいけない」等、両者の動きを結び付けて考える意見が出されました。パスがつながることによって新たなシュートチャンスが生まれることにも気付くことができました。



総合的学習(未来学習)

みやざき あきら
宮崎 彰

やまうち ひでのり
山内 秀則

第5学年「小麦で広がる交流の輪」

小麦を窓口にし、さぬきうどんについて調べた内容をアメリカの先生にビデオ会議で伝えました。会議を行う際には、国語で学習した「資料や動作を使いながら説明する」思考様式を転移・活用させ、相手に伝わりやすくするにはどうすればよいか考え、交流を行いました。

遠く離れたアメリカとでも、クリアな動画と音声を用いてFace to Faceのコミュニケーションをとることができ、ビデオ会議の良さを再確認することができました。



第6学年「なりたい自分を見付けよう」

なりたい仕事について知るために、あこがれの職業の方に送る質問Eメールを作成しました。国語で学んだ「内容・形式面に目を付ける」思考様式を転移・活用し、文書を校正することになりました。そして、Eメール〇×クイズを行い、なぜそうすることが大切なのか、「マナーやルールが守られていないEメール」を基に理由を話し合いました。このことを通して、件名や段落の分け方等、手紙とは異なるEメール特有のマナーやルールがあることに気付いていきました。



総合的学習(英語)



はが さやか やまもと ゆみ
芳我 清加 山本 祐実

Taylor Kirsten



とうじょう なおき かがわ ゆりこ
東条 直樹 香川由利子

第1学年「Body」

本時では、体の部位を英語で発音する歌やゲームを行い、英語の音声にふれたり、ALTや友達と関わる楽しさを味わったりすることをねらいに活動しました。「Head, shoulders, knees and toes…」と歌に合わせて自分の体をさわりながら発音を覚えていきました。また、体の部位を絵にしたカードを用いて、ALTが発音したカードにタッチするゲームを通して、楽しみながら語彙を増やしていくことができました。



第6学年「How is the weather?」

「外国にいる友達に電話で天気を聞き、その友達のところに行くための持ち物や服装の準備をする」そんな場面をシミュレートしました。HRTとJTEの会話を聞いた後、JTEと子どもたちが会話を行いました。初めは自信がなさそうだった子ども、何度も繰り返す中で元気よく話せるようになってきました。



最後に、持ち物を確認する内容のEメールを作成し、スペルに気を付けて持ち物の単語を書くことができました。

シンポジウム・講演

シンポジウム 「脳科学と教育、その連携の可能性」

1日目の午後には、ゲストとして、中村克樹先生（国立精神・神経センター神経研究所部長）、秋田喜代美先生（東京大学大学院教育学研究科教授）、コーディネーターとして村川雅弘先生（鳴門教育大学学校教育学部教授）をお招きし、本校教諭森山敬三（研究部長）も参加して、シンポジウムを開催しました。第一部は「脳科学研究の進展について」、第二部は「授業づくりと脳科学の連携」、第三部は「今後の展望」と位置付け、それぞれの立場から、貴重な御意見を聞くことができました。

第一部では、中村先生より、脳全般についてのお話に加え、「脳科学研究の流れとして近年は『脳を育む』という目標を掲げた研究が大きな流れとなっている。脳の中でも前頭葉が人間らしい行動を行うことに不可欠であり、バランスのとれた人間となるためには前頭前野を発達させる環境が大切である。」という最先端のお話を聞くことができました。秋田先生からは「子どもは学習する際、複雑なことを他者と共に深めていく。学校の実際の教室での問題を解明していくためには、個人のことだけではなく、全体がどうするのかをデザインしていく研究も大切である。」という御意見も頂きました。第二部では、当日の授業をもとにして「子どものモチベーションを引き出す工夫がされている授業があり、とても感心した。脳研究から考えても学習が促進されると考えられる。」（中村先生）、「子ども一人一人が充実した1時間を過ごしていた授業が見られた。検証データと共に個別の事例を検証していくことも教師の専門性の一つである。」（秋田先生）、「子どもの思考がどう働いているかということまで意識して授業づくりがされており、それが子ども一人一人をしっかりと見ていく授業づくりの原点にもつながっている。」（村川先生）という、御意見を聞くことができました。第三部では、「長期記憶に残った思考様式と、今までなかったものを新たに創り出すことを結ぶ力を伸ばす必要性」「教師の専門性を発揮するために、脳科学や認知心理学等の様々な立場の専門家と話し合うことの必要性」などの課題が挙げられ、今後の研究についての貴重なご示唆をいただくことができました。



講演 「脳を知り、脳を育む」

研究会2日目午後には、川島隆太先生（東北大学加齢医学研究所教授）より、上記の演題で、ご講演をいただきました。

動物の脳に比べて大変発達している人間の前頭前野には、子どもたちが生きるために必要な機能があるそうです。その人間ならではの脳、前頭前野をよりきちんと働かせるためには、「読み・書き・計算を行う」「コミュニケーションを行う」「目的をもって手指を使って何かを作る」といったことが有効であると、脳科学研究から証明されているそうです。このように、前頭前野がよりきちんと働くようにすることは、子どもを賢明に育むということにつながり、ひいては「生きる力」を育てることにつながるかと話してくださいました。また、前頭前野は小学校入学から思春期の始まりまで、力をためるようにゆっくり成長し、小学校を卒業するあたりからぐんと成長する時期がやってくるそうです。このことから、脳の発達に基づく教育の在り方を考えることが大切だと実感しました。また、実際にそれらの知見を生かして実践している学校の例を紹介してくださいました。

これらの脳に関する情報を得ることによって、我々教師が子どもたちから「なぜ学ばなければいけないか」という問いかけに対して、「学校での活動をきちんとすることが、生きる上で大切な脳を鍛えていることにつながるのだ」と説明できることに大変感銘しました。

ご講演後には、「ドリルの時間の内容はどのようなものがよいか」「軽度発達障害の子どもに対して脳科学研究からどのようなことが分かっているか」等、参会者から質問に対しても、現在明らかになっている範囲で、分かりやすく丁寧に応えていただきました。

今回の講演で学び得たことを、今後の研究に生かして参りたいと思います。



あ と が き

副校長 横山 新二 よこやま しんじ



音読の音が校舎に響きます。朝のドリル学習が始まりました。研究会の講演者川島隆太先生にEメールでご指導をいただきながら、様々な形態、内容を模索し、発達段階に応じたドリル学習の確立をめざして検証を始めています。

研究会を終えた今、研究会当日の授業を振り返り、ある職員は「脳科学研究の知見と本時レベルの授業との整合性について、具体化されていないのではないか。」と自分の実践を再度見直ししています。このように、脳科学研究を一つの手がかりとしながら、子どもの反応が一つ一つ見えるような実践をしていきたいという思いが、職員一人一人の中にわき上がってきています。授業づくりに関する理論を構築するために、研究会当日の授業を基に、「授業リフレクション」での意見をカテゴリーごとに整理し、分析も始めています。

つい先日、ある学校の現職教育に招かれた本校の職員から、「本校が提案したリフレクションの手法を取り入れて討議をしていました。」と報告を受けました。研究が広まっているようで嬉しい反面、研究に対する責任の重さを改めて感じ、身の引き締まる思いがしました。

このように次年度の研究に向けて本校の職員は様々な形で動き始めております。今後研究が一層深まりますよう、皆様の温かいご支援、ご指導をお願い申し上げます。

編 集 委 員

森 山 敬 三 小 西 寛
大 山 貴 久 山 内 秀 則
宮 崎 彰 東 条 直 樹
横 川 勝 正

平成18年7月19日

香川大学教育学部附属坂出小学校
TEL 0877-46-2692 FAX 0877-46-5218
E-mail sakaid@ed.kagawa-u.ac.jp